神さま だいすき

——10人の聖人たち——

文＊戸田 三千雄
絵＊田中 槙子

神さまだいすき

——10人の聖人たち

文／戸田 三千雄　絵／田中 槇子

神さまだいすき／目次

この本を読んでくださるお友だちへ 4

聖フランシスコ 9

聖クララ 35

パドアの聖アントニオ 61

聖エリザベス 91

ロヨラの聖イクナチオ 115

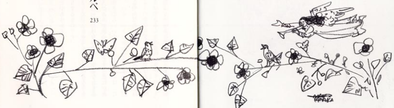
聖マルチノ・デ・ポレス 135

リマの聖ローザ 155

聖ベルナデッタ 173

リジュの聖テレーズ 203

聖マキシミリアノ・マリア・コルベ 233



この本を読んでくださるお友だちへ

きみは、どのように生きたらいいのか、考えたことがありますか。人はだれでも、自分の生きかたをあれこれ考えたり、ときにはなやんだりするものです。

いままでに、いろいろな生きかたをした人がありました。これからも、いろいろな生きかたをする人がいるでしょう。でも、人の一生は、ただ一度だけなのです。やりなおすことができません。また、どのように生きるかは、一人ひとりが決めることです。それが人の一生、つまり人生です。だからこそ、どのように生きたらいいのかを考えることは、たいへんだいじなことです。

人生が、自分の考えたようになるのなら、だれもなやんだりしません。きみも、もうわかっているように、人生は自分が考えたり、思ったようにかならずなるわけではありません。思うようにならないこともあるので、かえって人は生きることの意味をさがすのです。また、自分の思うようになったとしても、それがいちばんいいことで、正しいことというわけでもありません。

神さまの子どものわたしたちは、自分の考えだけでなく、天のお父さまのお考えをたいせつにして生きていきます。たとえ自分にはわからないことがあっても、神さまがいちばんいいことを考えていてくださると信じて、いっしょうけんめい生きるのです。

ところできみには、あんなふうになりたいと、あこがれている人がいますか。せんぱいや友だちのなかに、そんけいしている人がいますか。むかしの人たちのなかにも、りっぱな人がおおぜいいます。

『いじん伝』を読んだことがあるでしょう。ほかの人たちの生きかたを知ることは、自分の生きかたを決める助けになります。人生はただ一度だけで、やりなおすことができませんが、むかしの人の生きかたを知ることで、まえもって自分の人生を、よく考えることはできます。

教会のなかにも、いろいろな生きかたをした人たちがいました。神さまがだいすきで、イエスさまの教えられたように、いっしょうけんめい生きた人たちのことです。教会はその人たちを、「聖人」とよんでいます。

教会では、洗礼を受けるときに新しく名まえをいただきます。洗礼名とか、クリスチャン・ネームといいますね。そこには聖人の生きかたを見ながら、しあわせな一生をすごしますようにとの、教会のねがいがこめられているのです。

聖人の物語を読むと、どのように生きたら、天のお父さまの望まれたようになるのかがわかるようになるからです。イエスさまは、「あなたがたの光を、人びとのまえにかがやかしなさい。人びとがあなたがたのりっぱなおこないを見て、天の父をあがめるようになるためです」（マタイ5・16）とお話しになりました。聖人たちは、月や星たちが太陽をうけて夜空にかがやいているように、イエスさまの教えを生きて、世界にかがやいている光なのです。

この本を読んで、考えてほしいことがあります。

＊なぜ、あの人は聖人なのでしょうか？

＊どのようにして、聖人になったのでしょうか？

＊きみとどこがちがうのでしょうか？

『神さまだいすき！』といっている、せんぱいたちのことを学んでみませんか。なにか発見がありますように……。そしてきみも、神さまの子どもとしてどのように生きたらいいのか、よく考えてくださると、わたしもうれしいです。

なお、ここに書いてある聖人たちは、わたしの感じたままの聖人の物語です。小さいお友だちにわかりやすくとねがいながら、くふうして書きました。また、このほかに、もっとおおぜいの聖人が世界にいることもつけくわえます。聖人たちとの出会いを通して、神さまのお望みがわかりますように……。

一九八九年十一月十七日　聖エリザベスの祝日に……

著者

聖フランシスコ

アシジの人

この聖人は、イタリアのアシジという町で、いまから八百十年くらいまえに生まれた人です。お母さんのピカは、すぐにこの子に洗礼[1]をさずけてもらい、ジョヴァンニと名づけました。ジョヴァンニというのは、洗礼者ヨハネ[2]のことです。イタリア語では、ヨハネをジョヴァンニといいます。

そのとき、フランスに出張中だったお父さんのピエトロ・ベルナルドーネは、帰国してむすこの生まれたことを知るとたいへんよろこびました。うれしさのあまりこの子を『フランシスコ』とよびました。〈小さいフランス人〉という意味です。

そのころフランシスコという名まえの聖人は、まだいませんでしたが、たぶんお父さんはフランスがすきだったのでしょう。なにしろフランスとの商売でおおもうけをしていましたし、フランスの人びとの生活にあこがれていましたから。

ジョヴァンニも大きくなると、父の口まねをしてフランス語をしゃべったりしましたから、いつのまにかみんなも、このぼうやを『フランシスコ』とよぶようになりました。

おいしいお料理のひみつ

「お母さんはお料理がじょうずだね。ぼく、いつもおなかいっぱい食べてしまうんだ。」

「ははは……。まったくそうだね。わしも食べすぎたよ。」

夕食のあとで、父親とフランシスコ、弟のアンジェロはこんな会話をしていました。ベランダの外には、すずしげな糸すぎの木ぎがならび、そのむこうのウンブリアの平野には、夕日がしずんでいくところでした。

「お母さん、どうしてお料理がそんなにじょうずなの。頭がいいからだね、きっと。」

「いーやちがうぞ、フランシスコ。しんせんな材料とうでだよ。しんせんな材料はわしが買う。そして母さんがうでをふるうというわけさ。」

お母さんは、おかしそうにわらっていいました。

「あらあら、もっとたいせつなことがありますわ。お料理のコツはね、愛ですよ。うでが二十パーセント、頭の働きが三十パーセント、そして愛が五十パーセントいるのです。愛がいちばんです。」

父と二人のむすこは、たがいに顔を見合わせて、
「えーっ、愛がおいしい食事を作るの?」
と、おどろきの声をあげました。
「しんせんな材料をどう使うか、お料理するのにどのくらい時間がかかるのかも考えなくてはね。だから頭も使うわ。もちろんうでも必要よ。でもね、なんといっても愛がいちばんたいせつですわ。心をこめて作るから、おいしくできあがるのです。ごらんなさい、この花を……」
そういって、ベランダにならべられている、はち植の花をゆびさしました。それはお父さんが、だいじに育てているものです。
「あなた、どうしてお花に水をやったり、わるい虫をとったりするのですか? 毎日せわをするのはたいへんでしょう。でも、どれも美しい花をさかせていますわ。きっとあなたの愛にこたえているのでしょう。」
それからフランシスコのほうへ顔をむけました。
「フランシスコ、なぜ犬のせわをしたり、小鳥にえさをあげるのかしら。かわいいと思うからでしょ。それも愛ではないの? かわいがってみればよくわかるでしょう。みんな愛にこたえていることが……」
お母さんは静かにつぶやきました。
「人間も、神さまの愛にこたえて生きていくのが、幸福なのではありませんか。神さまもそれをお望みでしょう。」
「お母さん、聖書にも書いてあるよ〔神は愛です〕(ヨハネの第一の手紙4・8)って。お母さんはすごいね。」
お父さんのピエトロは、不満そうな顔をしています。
「それでもおまえたち、わしが金を出していることをわすれんでくれよ。わしの苦労もみとめてほしいものだ。わかるだろ、なあアンジェロ。」
アンジェロはうなずきました。
「お父さんのお金がなければ、お母さんもうでをふるうことはできないもんね。愛とか心なんていうものは、見えないからわからないよ。ぼくは目に見えるものがいいな。」
「でもね、お父さんが旅をしてきた国では、〝愛は、おなかにしみとおる〟ということわざがあるそうよ。そうでしょ、あなた。」
「うーん、そうだったな……」

お父さんは、なおもなにかいいかけましたが、フランシスコは立ちあがってまどのほうへ行きました。それにあわせるようにお母さんが続くと、お父さんもアンジェロも、二人のすがたを追って目を外へむけました。太陽はもうしずんで、雲が光っているだけでした。雲のみねは次つぎに色をかえていきます。美しいものをまえにして、ちんもくがみんなをつつみました。気がつくといちばん星が、うすむらさきの空にまたたいていました。

フランシスコは思いました。

（そうか、愛がいちばんなんだ。みんな愛にこたえている。太陽がいつもかがやいているから、星の光も消えることがないのだ……）

社会のしくみ

フランシスコの生まれたころは、中世といわれる時代でした。日本の歴史でいえば鎌倉時代にあたります。そのころから身分制度が生まれ、人びとのあいだに上下の区別ができて、しだいに中世の社会のしくみになります。この区別が人との関係や、社会のなかでの位置をさだめていました。たとえば、日本でいう士農工商です。

アシジでも、広い土地を持っている人びと、王・貴族・大名などは身分が高く、その人びとにつかえる騎士がとうとばれていました。土地を持たない人は、土地を持っている人にやとわれて、畑で働く農民になりました。

職人とよばれる人びと、たとえば石工・大工・かじ屋などは技術者でしたが、やはり人にやとわれたり、生活の道具を作ったりしていました。農民や職人は、自分たちの作ったものを市場で取りかえては、必要なものを手に入れていました。

やがて金や銀が、取りかえっこのかわりに使われるようになりました。畑仕事にたいして、小さな金のかたまりや銀のかたまりがわたされたのです。キラキラと光る小さなかたまりは、取りかえっこには便利でしたし、くさったりしませんから、たくさんためる人も出てきたのです。人びとの生活はしだいにかわっていきました。

こうしてだんだんと、お金を持つ人が力をつけてきました。商人といわれる人たちです。フランシスコのお父さんも、フランスで作られた織物を運んできて、町の人びとと取りひきしてお金持ちになった人でした。